NIPPON SPORT SCIENCE UNIVERSITY

身体動作学研究会ニュースレター

第 22 号　2013 年 12 月

事務局　日本体育大学スポーツバイオメカニクス研究室
（旧身体動作学研究室）東京都世田谷区深沢 7-1-1
Phone/Fax：03-5706-0950
e-mail：shintaidousa@ml.nittai.ac.jp（配信専用）
e-mail：shintaidousa-office@ml.nittai.ac.jp（返信専用）
※お問い合わせの際は，返信専用メールをご利用ください

H25.8 身体動作学研究会第 27 回大会（立命館大学）懇親会にて

コンテンツ

◆身体動作学研究会　会長のあいさつ　P2
◆平成２５年度身体動作学研究会　第２７回大会　P4
◆平成２５年度身体動作学研究会総会議事録　P7
◆平成 25 年度国際学会参加報告　P13
◆石井喜八先生３周年を偲ぶ会の報告　P23
◆平成２６年度　第２８回身体動作学研究会のご連絡　P26

身体動作学研究会　会長のあいさつ

「第 27 回身体動作学研究会に参加して」

船渡和男（日本体育大学）

2013 年日本体育学会前日の８月 27 日に体育学会の会場である立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて第 27 回身体動作学研究会を開催しました。プログラムにもあるように今回は一般発表８題、実行委員企画のショートトークに５題そして鈴木久雄氏の講演がありました。その中で私が感じたところを述べさせていただきます。先ず一般発表では、体育学会の予備発表会として参加した私の研究室の院生を中心にした６題の発表に対しては、多くの方から積極的な質問や意見をいただき、本番に向けて質疑応答の場を提供していただいたことに感謝いたします。一方残りの一般発表のうち新宅幸憲氏らはライフワークである子どもの立位姿勢の身体動揺の計測について９～10 歳児童についてラグビースクールに通う学童の特徴を示しました。その時に静的平衡性と動的平衡性とは必ずしも一致しないことがみられ興味深く感じられました。山本憲志氏らからは、これも氏のライフワークとなっている人工炭酸泉浴の筋疲労回復への効果についての研究の紹介がありました。あわせて次セッションのショートトークでは炭酸泉研究を花王株式会社と共同でバブの開発を行っているという試みが紹介され、山本氏いわく地方の弱小単科大学からの大いなる奮闘が紹介され、我々も研究の活用化を考える機会を頂きました。ほかのショートトークでは、袴田智子氏からはＪＩＳＳがリオデジャネイロ五輪に向けてサポートしようとしているバスケットボール選手のフィジカルスタンダードの作成の紹介、渡邊航平氏からは氏がＩＳＥＫの評議員として活躍されており、２０１４年７月にはローマにて学会がある旨の紹介、和田匡史氏からは本年４月にオープンした国士舘大学世田谷キャンパスの総合スポーツセンター、特に和田氏が中心となって作り上げた室内プールと実験内容についての紹介があり、そして河端隆志氏からは関西大学が取り組んでいる産官学、自治体共同プロジェクトの科学的根拠に基づく健康増進事業の紹介がありました。これらショートトーク５氏とも若手・中堅であり、積極的に学術や事業を展開していく姿をみることができわれわれ傍聴者にとって、体育、スポーツ・健康科学への社会貢献という意味からも非常に参考となりました。今回初めてこのような会を企画していただいた山崎先也氏（富山大学）に感謝申し上げます。最後に鈴木久雄氏の「熱中症予防の現状と課題」に関するご講演では、岡山大学の運動部員へのアンケート調査に基づく熱中症の認識、そして熱中症への知識を具現化することによって予防と重症化を防ぐことを狙いとした実践報告がありました。特に市販のスポーツドリンクの具体の実名を挙げてのそれぞれの成分比較や独自にスポーツドリンクを作る方法などが示され、スポーツ現場に視点をおいての内容は非常に理解しやすく有益でした。

総会では、本年３月の研究会総会で協議事項であった年会費２，０００円（従来通り）

と大会参加費１，０００円（学生無料）の確認及び提案がなされ了承されました。これら年会費や参加費は大会での講師派遣などによる研究会の充実、身体動作学研究会基金の設立による研究会賞（案）およびニュースレターの充実に役立てていく方針であることが示されました。インターネットの普及によりわざわざ研究会に参加しなくても知識が容易に得られる時代ではあるが、研究会に足を運ばなければ得られない貴重な情報や若手研究者の助成など研究会の充実に役立てて行きたいと考えています。

懇親会では立命館大学のレストランで琵琶湖をみながらおいしいビールで参加者同士の情報交換を活発に行うことができました。今回の会場設定では立命館大学の岡本直輝先生と伊坂忠夫先生に、翌日から日本体育学会の準備という大忙しの中で、多大な便宜を図っていただきました。感謝申し上げます。

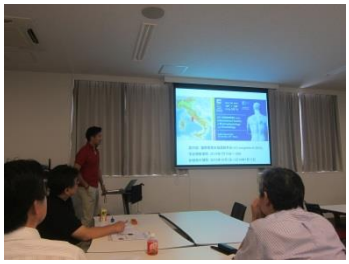
会長挨拶

大学院生
（ロンドン五輪競泳代表　堀畑裕也）

新宅先生

研究会の様子

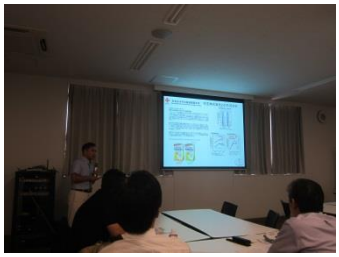
袴田先生



渡邊先生

河端先生

鈴木先生



山本先生

懇志会の様子

★研究会プログラム★

平成２５年度身体動作学研究会　第２７回大会

日時：平成 25 年　8月２７日（火）
場所：立命館大学　インテグレーションコア　１階　アカデミックラウンジ
参加者一覧：以下五十音順

秋武寛（日本体育大学大学院），伊坂忠夫（立命館大学），岡本直輝（立命館大学），大津玖滋（東京歯科大），柏木悠（日本体育大学大学院），河鰭一彦（関西学院大学），河端隆志（関西大学），齋藤愛見（日本体育大学大学院），新宅幸憲（びわこ成蹊スポーツ大学），鈴木久雄（岡山大学），武重雅則（日本体育大学大学院），田子孝仁（徳島文理大学），積山敬経（大阪工業大学），中山悌一（立命館大学），仁木康浩（日本体育大学大学院），袴田智子（国立スポーツ科学センター），濱田初幸（鹿屋体育大学），平野智也（日本体育大学大学院），船渡和男（日本体育大学），古川真衣（日本体育大学），堀畑裕也（日本体育大学大学院），保井俊英（武庫川女子大学），山崎先也（富山大学大学院），山本憲志（日本赤十字北海道看護大学），和田匡史（国士舘大学），渡辺喜秀（(株)コミュニティーサポート），渡邊航平（中京大学），

以上 28 名

●平成25年　8月２７日（火）

12：20－　立命館大学スポーツ健康科学部・施設案内
12：30－　受　付
13：00－　会　長　挨　拶

【一般研究発表】

第１セッション（13:10 ～ 15:20）

座　長：　新宅幸憲（びわこ成蹊スポーツ大学）

1．ドルフィンキックとバサロキックの動作の違い

〇堀畑裕也(日本体育大学大学院トレーニング科学系)、柏木悠(日本体育大学大学院)、仁木康浩(日本体育大学大学院)、袴田智子(国立スポーツ科学センター)、船渡和男(日本体育大学)

2．地面反力の変動からみたトレッドミル歩行動作の安定性の評価

〇平野智也（日本体育大学大学院トレーニング科学系）　柏木悠（日本体育大学大学院）　袴田智子（国立スポーツ科学センター）　船渡和男（日本体育大学）

3．女子クラシックバレエダンサーにおける足ポジションの違いが姿勢に及ぼす影響
〇齋藤愛見（日本体育大学大学院トレーニング科学系）、柏木悠（日本体育大学）、袴田智子（国立スポーツ科学センター）、船渡和男（日本体育大学）

4．フィン着用によるドルフィンキック泳中のキネマティクス
〇仁木康浩(日本体育大学大学院)、 柏木悠(日本体育大学大学院)、 堀畑裕也(日本体育大学大学院トレーニング科学系)、 松本弥生(日本体育大学大学院トレーニング科学系)、袴田智子(国立スポーツ科学センター)、 船渡和男(日本体育大学)

第２セッション（14：20 ～ 15：20）

座　長：　渡邊航平（中京大学）

5．体操競技ジュニア選手の屈膝前転および伸膝前転動作中における角運動量の検討
〇秋武寛（日本体育大学大学院トレーニング科学系）、柏木悠（日本体育大学大学院）、
船渡和男（日本体育大学）、袴田智子、平野裕一（国立スポーツ科学センター）、
水鳥寿思（大阪大谷大学）、立花泰則（日本体操協会）

6．脚外旋角度およびスタンス幅の違いが垂直跳び跳躍高に及ぼす影響
〇柏木悠（日本体育大学大学院）、袴田智子（国立スポーツ科学センター）、平野智也（日本体育大学大学院トレーニング科学系）船渡和男（日本体育大学）

7．立位姿勢における静的および動的平衡性の分析
～ラグビースクールのこどもを対象として～
〇新宅 幸憲（びわこ成蹊スポーツ大学）灘 英世（関西大学）、溝畑 潤（関西学院大学）
溝畑 寛治（関西大学）

8．人工炭酸泉浴が最大下運動による筋疲労回復を促進させる可能性
山本憲志（日本赤十字北海道看護大学）、和田匡史（国士舘大学）、柳等（北見工業大学）、
橋本眞明（帝京科学大学）

【実行委員企画・ショートトーク】（15：30～15：55）

座　長：　河鰭一彦（関西学院大学）

9．研究とサポート支援―国立スポーツ科学センターの事例―

袴田智子（国立スポーツ科学センター）

10．ISEK 2014 のアナウンス

渡邊航平（中京大学）

11．国士舘大学での身体動作学研究

和田匡史（国士舘大学）

12．地方看護系単科大学における研究活動の取り組み

山本憲志（日本赤十字北海道看護大学）

13．科学的根拠に基づく健康増進（Evidence Based Health-promotion）支援事業の展開

河端隆志（関西大学）

【講　演】（17:00 ～ 18:00）

「熱中症の発症と予防に関する研究」

座長：　山本憲志（日本赤十字北海道看護大学）

「熱中症予防の現状と課題」

講師：　鈴木久雄（岡山大学）

【総　会】（17:00 ～ 17:30）

【懇親会】（18:00 ～ 20:00）

会場：ユニオンスクエア

平成２５年度身体動作学研究会総会議事録

日時：平成 25 年　9月２７日（金）　１７：３０～１８：００
場所：立命館大学びわこ・くさつ　キャンパス
議事録：袴田智子

協議事項

１．平成 25 年度予算について（資料 2）

1）年会費について

・次年度より年会費 2000 円（学生無料）を徴収することが決定された。徴収方法は研究会開催時の受付またはニュースレター（NL）に記載された振込先に各自振込む方法の２択とする（次年度より NL に振込先を明記）。

2）大会参加費について

・大会参加費については、各大会実行委員会に一任するものとすることが決定された。

3）講演会講師謝金について

・原則として、以下を目安とすることが決定された。
講演（60 分以上）：会員－0 円，日体大 OB－1 万円，非会員－2 万円
シンポジスト（60 分未満）：会員－0 円，日体大 OB－5 千円，非会員－1 万円

３．身体動作学研究会基金について（資料 3）

・別紙（資料 3）参照。身体動作学研究会基金はまずは研究会奨励賞を設け表彰する目的で、設置することで了承された。ただし、事務局の会則をもとに、再度規約を再考し、メールにて会員の了承を得，来年度から発足することとなった。
・付則身体動作学研究会奨励賞（案）第 5 条の賞品は、一万円を授与することで了承された。

４．次年度大会について

・日体大世田谷キャンパスで実施する方向で検討、また実行委員長は和田先生（国士舘大学）との決定がされた。

５．その他

・船渡会長より，平成 25 年 9 月 21 日（土）：日本体力医学会期間中に，石井喜八先生三回忌記念行事を行うとの連絡があった。
・日体大 HP にて動作学研究会運営委員会および実行委員会の名簿 PDF 閲覧ページ作成

を依頼する（船渡先生）

・研究会年２回開催の規約を修正するとの意見があった。

・以下のとおり、動作研メーリングリストの使用の連絡があった。

身体動作学研究会会員配信用メールアドレス：

shintaidousa@ml.nittai.ac.jp

平成 25，26 年度身体動作学研究会役員 ※配信用メールアドレス：

shintaidousa-office@ml.nittai.ac.jp

※役員→会長（船渡和男）、運営委員会委員長（鈴木久雄）、総務・会計（西山哲成・古川真衣）、会計監査（田子孝仁・佐藤孝之）、ニュースレター（和田匡史・大石健二・袴田智子・柏木悠）

資料２

身体動作学研究会　平成 24 年度決算報告

自平成 24 年４月１日　至平成 25 年３月 31 日

身体動作学研究会事務局

会計監査担当：田子孝仁，佐藤孝之

身体動作学研究会　平成24年度決算報告

自平成24年 4月 1日　至平成25年 3月 31日
身体動作学研究会事務局
会計担当：西山哲成

収支決算

単位：円

収入総額	2,787,159
支出総額	2,787,159
差引残高	0

収入内訳

単位：円

項　目	決算額	備　考
①前年度繰越金	2,786,493	
郵便局担保定額貯金　（　0円）		
郵便局普通預金　（2,762,493円）		
平成21年度研究会会費　（24,000円）		
②利子	666	
定額貯金　（　0円）		
普通預金　（666円）		
計	2,787,159	

支出内訳

単位：円

項　目	決算額	備　考
①次年度繰越金	2,787,159	
郵便局担保定額貯金　（　0円）		
郵便局普通預金　（2,763,159円）		
平成21年度研究会会費・現金※（24,000円）		
計	2,787,159	

以上，監査の結果，正確なることを認めます．

平成 25 年 4 月 25 日

田子孝仁　印

資料３

身体動作学研究会基金規約（案）

第１条　（名称）

この基金は身体動作学研究会基金（以下　基金と略す）と称する。

第２条　（目的）

この基金は，スポーツ科学の進歩発展に資することを目的とする。

2.　本基金の目的を遂行するため，研究会奨励賞を設け表彰する。表彰の細則については別に定める。

第３条　（所在地）

東京都世田谷区深沢 7-1-1　日本体育大学　身体動作学研究会事務局に置く。

第４条　（運営）

この基金の運営は，身体動作学研究会事務局（以下　事務局）が行う。

2.　事務局は，その運営状況を，身体動作学研究会運営委員会（以下　運営委員会）に，監事の意見を付して報告する。

第５条　（募集）

この基金は，本基金の目的に賛同する有志の寄付によって継続的に構成する。

第６条　（役員）

この基金に，次の役員を置く。

（1）　代表　１名

（2）　副代表　１名

2.　代表は，身体動作学研究会会長とする。

3.　副代表は，身体動作学研究会運営委員会にて選出する。

第７条　（使用）

この基金の使用については，年１回の研究会奨励賞の副賞とする。

第８条　（使途の報告）

事務局は，この基金の使途と収支を翌年度の運営委員会に報告する。

第 9 条　（会計年度）

この基金の会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり，翌 3 月 31 日に終わる。

第 10 条　（規約の改定）

本規約の改定は，役員会の過半数の同意をもって改正することができる。

付則

この規約は 2014 年 4 月 1 日より実施する。

付則　身体動作学研究会奨励賞（案）

第１条　研究会規則第に基づいて身体動作学研究会奨励賞（以下研究会奨励賞という）に関する付則を定める。

第２条　研究会奨励賞は，当該年度の身体動作学研究会一般発表における優秀な発表を表彰することにより，スポーツ科学研究の振興と奨励を図ることを目的とする。

第３条　研究会奨励賞の受賞者は，研究会における最優秀発表者とし，以下を選考項目とする。

1)　研究成果ならびに将来発展の可能性。

2)　スポーツ現場への実際的貢献。

2.　受賞者数は原則として毎年１名とする。

3.　受賞者は，研究会一般発表における発表者のみとする。

第４条　選考委員会は運営委員会出席者全員を選考委員会委員とし，委員会を構成する。

2.　選考委員会委員は研究会抄録と発表から，最も優秀と思われる発表１件を投票し，選考委員会が最も得票数の多かった発表を研究会奨励賞と決定する。

3.　選考委員会は，研究会総会までに受賞者を決定する。

第５条　表彰は研究会総会において行い，受賞者には研究会より賞状及び副賞（10,000円）を授与する。

平成 25 年度国際学会参加報告

学会会場は、様々な仲間や研究者と出会い、新しい知見を得る場でもあります。今回の NL では今年度海外学会で発表された先生方にお願いして、学会報告ならびに来年度の情報提供をしていただきました。

来年度、どこで発表されるか迷っている方はぜひ参考にしていただければと思います。

ECSS

スポーツ科学の現場応用を感じて

柏木悠（日本体育大学大学院）

◆学会名：ECSS（18th annual Congress of the European College of Sport Science ECSS Barcelona 2013）
開催日時：2013 年 6 月 26 日（水）～29 日（土）
開催場所：スペイン　バルセロナ
◆動作学研究会からの参加
伊坂先生（立命館大学）、竹ノ谷先生（星薬科大学）、袴田先生（国立スポーツ科学センター）その他：早稲田大川上研、大阪体大伊藤研、石川研、筑波大高木研、兵庫教育大小田研、首都大学山内研　など多くの日本人が参加していました。
◆学会の特色

ECSS の学会会場は、1992 年のバルセロナオリンピックが開催されたモンジュイック丘にあるメインスタジアムのすぐ近くで開催された。私自身当時はまだ小学 3 年生ながらマラソン女子有森裕子選手、競泳岩崎恭子選手、柔道古賀、吉田選手の記憶はかすかに残っている。基本的な学会情報は、参加国 86 ヶ国、参加人数 3112 人、2454 演題、253 セッション、業者数 66 社と比較的規模の大きい学会であるが、研究発表内容は全体的に現場にすぐに応用することを目的とした研究内容が非常に多かった。参加者の多くが現場志向の研究者が多いため、学会期間の４日間は情報交換をして非常に充実した内容であった。私自身の専門競技がアルペンスキーであるため、ヨーロッパを中心とするスポーツの情報、例えば、スキー競技（アルペン、ジャンプ、クロスカントリー）、自転車（ロードサイクリング）、カヌー、もちろんサッカーの研究発表も多く、興味深い知的好奇心を刺激する内容ばかりであった。特徴的なセッションとして、「Training and Testing」では、現場指導や、競技力向上のサポートに携わる立場として日本との違いを感じた。実際にナショナルレベルや、ジュニアナショナルレベルの選手に対して、単純に選手のフィットネスレベルを測定、評価しているだけではなく、研究者が監督・コーチとトレーニング内容まで深く

介入している点が多くみられた。質問の内容としては、対象者（トップアスリートなのか大学アスリートなのか？など）や、プロトコールの詳細、内容の確認など明日にでも現場で使用したいという意思が感じられ、「Training and Testing」は日本の測定評価という意味との違いがみられ、この学会を象徴するような１つのセッションであるように感じた。また、バイオメカニクス研究のトピックスとして裸足ランニング、接地の違いによるランニングエコノミーの内容は多くの人が集まり、活発なディスカッションが行われていた。若手研究奨励賞は大阪体大の院生が受賞し、過去にも多くの日本人が受賞している国際学会の一つである。学会参加者には、昼食（ランチバック）とセッションの合間には毎回コーヒーと甘いお菓子が用意されている。バンケットに関しては、開催地の象徴となるような場所で行われ、今回は、巨大な鍋？で作られたパエリアやワインなどが出された。外国の方はたぶん朝まで騒がれていると思われる・・・・。オリンピックの歴史と、最新の科学に触れながらの学会は充実したものであった。

◆発表内容

・発表形式：オーラルとポスター（Debate:プレゼンあり ,Not debate:プレゼンなし　※今回のみ）の選択が可能。オーラルの方式は、基本的に変わらないが、ポスターに関しては e-poster という形式をとっている。これは、予め学会の 1 ヵ月前くらいにフォーマットに沿ったポスターデータを学会事務局に送ることが義務付けられている。学会当日は、紙ベースのポスターの持参、掲示の必要はなく、スクリーンに映し出された自分のポスターで 3 分の発表、2 分の質疑応答で進行していく。従って、ポスターとはいえ基本的にはミニオーラルに近く、また、興味のあるポスターを後でみる場合は、基本的に会場に設置されている電子ポスター閲覧専用 PC にて検索しなければならない。発表者との情報交換は、ポスターでありながらオーラルの質疑応答と変わらないため、セッション終了後にデータをみながらディスカッションすることは電子ポスター閲覧専用 PC に発表者と一緒にいかなければならないので難しい。

◆次回学会のアナウンス

・学会日時・場所：2013 年 7 月 2～5 日　オランダ　アムステルダム

・アブストラクト締切り期日：2014 年 2 月 15 日

・http://www.ecss-congress.eu/2014/14/

サグラダファイミリア

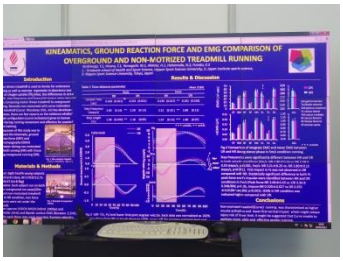
学会会場

オリンピックスタジアムと電波塔

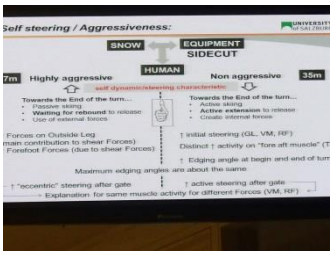
巨大パエリア

バンケットの様子

学会メイン会場



筆者のポスター



スキーセッション

クロージングセレモニー

ISBS

「ISBS って何の略？」

田子孝仁（徳島文理大学）

◆学会名：ISBS (International Society of Biomechanics in Sport)
　開催日時：7/7(日)～7/11(木)の５日間
　開催場所：National Taiwan Normal University (国立台湾師範大学)

◆動作学研究会からの参加

　身体動作学研究会からは寂しいことに私一人だけの参加でした。日本人参加者として他には筑波大の阿江研グループ、名古屋大の布目研グループ、早稲田大の矢内研グループ、東大の深代研グループといった国内でもスポーツバイオメカニクス分野で活発に活動されているグループの参加がみられました。国内トップレベルの研究室はフットワークが軽いですね。

◆学会の特色

　私にとって ISBS は学生のころから参加している学会で、一番なじみのある国際学会であり、自分の研究分野（スポーツ活動での打撃に関する動作分析）とどんぴしゃな専門学会なので非常に面白い学会です。学会は毎年開催され、開催地は世界中を転々とまわります。参加者は例年 200～300 人位で、こじんまりとしていますが、中身は濃く最新のスポーツ

バイオメカニクスの研究状況がわかります。自分の研究で参考文献として使っている著者の顔もたくさん目にでき感動もあります。さらに学会期間中の中日に半日観光ツアーが組み込まれその地の主要観光スポットに連れて行ってくれるので、自分で観光する必要がありません。そして観光コースは数種類用意されており、その中から選択できるようになっています。提出原稿は A4 サイズで 4 ページになります。それを 2 名の査読者が審査し、指摘された修正個所を修正すると発表が許可されます。

◆発表内容

自分はポスター形式の発表でしたが、オーラルも選択可能です。語学力の低さが課題ですが、なんとか質問者とのやりとりもこなすことができました。また，自分の研究を参考文献に使ってくれている研究者もいて、うれしくもあり不思議な感じもありました。

◆次回学会のアナウンス

学会日時：2014 年 7/12(土)～7/16(水)の 5 日間

場所：アメリカ、テネシー州にある East Tennessee State University（ETSU）

アブストラクト締切期日：2014 年 2/7(金)

学会 URL：http://www.etsu.edu/academicaffairs/scs/isbs2014/

＊なお 2015 年の ISBS は、初の日本開催となる“うわさ”を聞いております。

台湾師範大学入口

学会案内ポスター

学会会場となる講堂

歴史を感じさせる講堂内

地球の真裏は遠かった

山本憲志（日本赤十字北海道看護大学　健康科学領域）

和田さん、柏木さんから研究会のニュースレター原稿を依頼された。軽く「うん、いいよ」とは言ったもののすっかり失念。北大との共同研究でセントアンドリュース大学医学部を訪れている最中（9/10）に督促のメールが…。「しまった」である。最近、「しまった」を多く感じたり、その言葉を発したりしている。そんな自分に歳を取った事実を確認してしまう。

さて、ISB（International Society of Biomechanics）は今回で 24 回目の開催であった。今回はなんと南米ブラジルのナタールと言う赤道に近いリゾート地での開催となった。当地へは日本から最短で行く場合、まずニューヨークへ行き（12 時間）、そこからサンパウロかリオデェジャネイロ（８～９時間）、そしてナタール（3 時間半）となる。順調に行って片道に 2 日を費やす。私は北海道からとなるのでさらに 1 日多く、また、ニューヨーク便が満席で以下の経路となった。女満別ー羽田、成田ーシカゴーマイアミーリオデェジャネイローナタールである。現地での宿泊よりも往復の日数が多くなった。彼の地に移民された方たちの苦労が慮れる。

ISB は 2 年に 1 度開催される学会である。私は 97 年に東京都立大学で開催された大会に初めて参加し、その後、05 年のクリーブランド、07 年台湾、09 年ケープタウン、11 年ブリュッセル、そして今回と発表を行っている。その理由はとてもフランクな学会でギスギスした雰囲気がなく、語学力の乏しい我々でも好意的にディスカッションを行って貰えるからである。また、驚くような話題が必ず 2、3 あるからである。さらに、その楽しい雰囲気は最終日のバンケットにも現れる。

今回の ISB には研究室 OB として私の知りうる限り、西薗さん（鹿屋体育大学）、船渡さん（日本体育大学）、伊坂さん（立命館大学）、和田さん（国士舘大学）、袴田さん（国立スポーツ科学センター）、柏木さん（日本体育大学大学院）が参加されていた。船渡さん、袴田さん、柏木さん、そして私は筆頭者としてポスター発表を行った。伊坂さんはご自身のゼミの 3 年生が筆頭者で発表指導していた。私が学部 3 年生の時は剣道部第一合宿所での生活で朝晩の稽古に明け暮れていた。同じ体育系学部でも大きく変わったものだと感じてしまった。さらに、和田さんは今回、学会からの指定により（メールで何度も口頭発表は避けて欲しいと嘆願していたようだが…）口頭発表となった。ここから和田さんの悪戦苦闘が始まった！その思い、私も良く分かる。昨年のオーストラリア・スポーツ医学会で同じ目に合っているからである。しかし、和田さんと私の違いは明らか（流石、教授！！）。彼はホテルの部屋（私と同室）に小型のプロジェクターを持ち込み、PC に向かっているではないか！20 年前、小型のスライドプロジェクターをホテルに持ち込み、石井先生に発表

練習を厳しく指導された記憶が蘇った（K 工科大の T 橋さんは最も愛情ある？指導を受けていた徳島の夜）。そこからデータの表現方法、英語の言い回しなどを発表ギリギリまで修正した。

和田さんの口頭発表はお見事で、特にドルフィン・キックの筋電図を水中で綺麗に記録し、優秀選手の特徴を捉えることに成功していた。多くの質問を受け、充実した発表となった。今後の更なる発展が期待される。

私は入浴前後における重心動揺についてポスター発表を行った。入浴は温熱刺激、静水圧による物理的刺激など生体に様々な影響をもたらす。また、近年の研究で姿勢制御能は体性感覚のみならず前庭系などの機能評価にも用いられるようになった。その成果の一部を発表したが、お茶を濁す程度である。

開催地がラテン系の影響だろうか口頭発表の途中に停電は起こるし、暗いまま発表を続けるよう言われる気の毒な方もいたし、プログラムの間違いは多いしと、かつて無い大会運営となった。とりわけポスター発表は夜 8 時から 10 時までの発表となり、途中、地元のバンドが会場内で演奏を行い、ディスカッションどころではなくなってしまった。これも国民性の違いなのであろうか？来年の W 杯、16 年のオリンピックが危惧される。

それにしても、私よりも年齢の高い多くの方々が院生の指導など多忙にも拘らず筆頭者として発表を行っている姿勢に研究者としての見本を見た思いがした。石井先生がおっしゃっていた背中での教育を実践されている様子を垣間見た。

次回の ISB はイギリス グラスゴーである。ちょっと安心と思うのは私だけ？兎も角、多くの研究者の成果を発表し合える良い学会となって欲しいものである。

この原稿を書いているのも先のイギリス出張の帰りの機中。何かの因縁であろうか。いや、再び彼の地に来いとの思し召しであろう。3 年後、多くの方とスコッチウイスキー片手にディスカッション出来る様、データ収集に頑張らねばとエコノミークラスの席で誓っている。

筆者のポスター発表

深夜におよぶミーティング

学会に参加した日本人グループ

International Society of Biomechanics （ISB）2013 での Oral presentation を終えて

和田匡史（国士舘大学理工学部）

2013 年 8 月 4 日から 9 日まで、ブラジル（ナタル、南米大陸の東端の町）で開催された International Society of Biomechanics （ISB）2013 に参加し，競泳のドルフィンキックの動作分析について、Oral presentation を行った。身体動作学研究室（現スポーツバイオメカニクス研究室）関係の参加者は、鹿屋体育大学の西薗秀嗣先生、日本体育大学の船渡和男先生、柏木悠先生、立命館大学の伊坂忠夫先生、日本赤十字北海道看護大学の山本憲志先生、国立スポーツ科学センターの袴田智子先生であった。また日本とは地球の真裏になるブラジルでの学会開催であったが、日本からの参加者も多数みられた。

大会２日目に現地へ到着し、３日目となる８月５日（火）は、山本憲志先生（Comparison of standing posture control between pre and post head out water immersion）、柏木悠先生（Relationship between plantar load distribution and lower joint kinetics during take-off phase in vertical jump）のポスター発表があった。通常の学会であれば、遅くとも 19 時までには終わるのだが、今回の学会は，20 時からポスターセッションがはじまり、22 時までセッションの時間が設けられているという夜遅くまで非常に研究熱心な学会であった（セッション中に生バンドの演奏やダンスが入り，ポスター前で話している声が聞こえないというハプニングがあった）。

大会４日目にあたる８月７日（水）は、私の発表する Oral セッション（Sport Biomechanics: Swimming）があった。ホテルで同室だった山本先生に何回も suggestion を頂きながら、部屋の壁をスクリーンに夜中まで発表練習を重ねて Oral presentation（Biomechanical analysis of lower limbs during underwater gliding and dolphin kick movement in swimmer）に臨んだ。国内一流および大学生競泳選手の水中ドルフィンキックについて、運動学的、筋電図学的分析についての発表を行った。ISB で水泳のみのセッションが開催されることは珍しく、地元ブラジルをはじめポルトガル、イタリア、オーストラリアなどから参加していて、オリンピックの競泳競技で活躍している国の参加者が多く見受けられ、選手の活躍と研究活動には正の相関関係があるように思われた。肝心の私の発表はというと、会場に入ってみると発表者用のデスクがなく当初予定していたシチュエーションと違い、マイク、レーザーポインターに加え、発表原稿も手に持たなければならず、二つしかない手のひらをフル活用してのプレゼンになった。発表時間は 10 分間、質疑応答が 5 分間の 15 分間が私に与えられた時間であり、この限られた時間の中で自分の言いたいことをしっかりといえるのかどうかの不安と、5 分間の質疑応答に答えられるかが心配の種であった。プレゼンは、前日に何回も山本先生と練習を重ねたため、緊張からくる体動を抑えつつ、スクリーンや原稿の助けを借りて何とかクリアした。5 分間の質疑応答では、多くの質問やコメントを頂き、十分な回答は発言できていなかったと思うが、

好意的な内容が多く、次の研究に繋がる良いヒントを得た。

大会５日目の８日(木)は，船渡和男先生(Human body segment parameters determined by 3D scanning anthropometry)、袴田智子先生（Characteristics of body segment mass distributions using 3D anthropometry method in Japanese top male athlete）のポスター発表があり、活発な討論がなされていた。

今回口頭発表を行ってみて、思い切って発言すること、自分からアピールすることの大切さを改めて確認することができたとともに、測定の精度を高め正しいデータを取得することはもちろんのこと、研究の方向性をより明確にする必要があると痛感した。前日深夜まで発表練習にお付き合いいただいた山本先生、帰りのシカゴオヘア空港での乗り換えに時間が少しあったので、スターバックスで筋電図についてご教授頂いた西薗先生をはじめ、ご指導いただいた諸先生方に深謝するとともに、この研究をさらに発展させることをお誓いしたい。

◆次回 ISB 2015 Congress XXV は以下の通りです。

・会期　2015 年 7 月 12 日（日）～16 日（木）

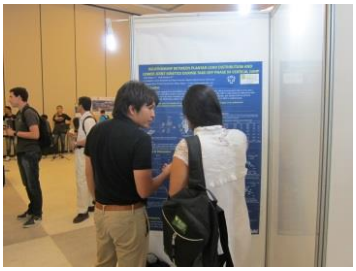
・場所　イギリス グラスゴー

・ＵＲＬ　http://www.isbglasgow.com/

緊張して順番を待つ筆者

発表の様子

クロージングセレモニーの様子



このすぐ隣でお祭り騒ぎをされ、

まったく聞き取れない　柏木

日体大グループ

立命館大学グループ

名物シェラスコの食べ放題

ひと仕事を終えて満面の笑みの筆者

ISK

「Face to Face at Brisbane」

渡邊航平（中京大学　国際教養学部）

◆学会名、開催日時、開催場所

19th International Society for Electrophysiology and Kinesiology (ISEK)

2012 年 7 月 19 日から 21 日

オーストラリア，ブリズベン

◆動作学研究会からの参加

渡邊航平

◆学会の特色

ISEK は和訳すると国際電気生理運動学会であり、主に筋電図法を用いた電気生理学に関連した研究とバイオメカニクスをはじめとした身体運動(スポーツ動作，歩行，姿勢制御など)に関連する研究が発表されている。スポーツ科学、医用工学、リハビリテーション医学などの領域からの研究者が多く参加するが、分野は問わない風潮が感じられ、広い研究領域から研究者が集まる。なお、 Journal of Electromyography and Kinesiology は ISEK が発行している国際学術誌であり、当該雑誌の contents を見ていただくと学会の傾向も知ることができると思われる。

◆発表内容

発表形式はポスターおよびオーラルである、今回，私は「Motor unit firing pattern in type 2 diabetes mellitus patients during sustained low force contraction」(2 型糖尿病患者における低強度持続的筋収縮中の運動単位発火パターン)という題目でポスター発表を行った。従来は、筋内に電極を挿入することで運動単位発火パターンが記録・評価されてきたが、近年、2 次元平面状に配列された特殊な表面電極を用いることで非侵襲的に運動単位の活動を記録できる手法がイタリアで開発された。本研究は、この新たな手法を応用した研究であり、筆者がイタリアへ留学した際に行った内容である。発表では国際学術誌の editor を務めるような研究者達から厳しくも非常に有用なコメントを多数得られた。国際学術誌への投稿時に referee と行うような discussion が face to face で行えるのは当該学会を含めて国際学会の醍醐味だと思われる。なお、当学会でもらったコメントも参考にして、本研究は国際学術誌 Muscle & Nerve に論文として投稿し掲載が決定している。

◆次回学会のアナウンス

ISEK は隔年開催であり、次回は 2014 年 7 月 15 日から 18 日までイタリアのローマで行われる。抄録受付期間は 2013 年 10 月 1 日から 2014 年 1 月 15 日である。

http://isekconference2014.com/

今回の学会より、筆者は ISEK の評議員に選出され、他国の研究者と共に学会運営に携わらせてもらっています。次回大会に興味がある方は知りうる限りの情報をお教えしますので問い合わせください。(筆者連絡先：wkohei@lets.chukyo-u.ac.jp)

ISEK 評議員メンバー(上段左：筆者)

石井喜八先生３周年を偲ぶ会の報告

日時：平成２５年９月 21 日（土）17:00～
場所：日本体育大学（世田谷キャンパス）1302 教室

指定発言　新宅幸憲
びわこ成蹊スポーツ大学教授　日体大 49 年卒

「ご家族の近況報告」

石井先生３周年偲ぶ会が 2013(平成 25)年９月 21 日、日体大世田谷キャンパス 1302 教室において執り行われた。身体動作学研究会が主催となって、船渡君、西山君、岡山大の鈴木君を中心として準備がなされ、助教の古川真衣さんの手を煩わせた。

はじめの話は矢部先生の「石井喜八先輩とのきずな」であった。石井先生が東大の助手時代の話からはじまった。約 52 年前のお二人の先生の若い頃のエピソードを交えて。矢部先生は「私の話から皆さんに何かを伝えたいし、何かを汲み取ってほしい」ということであった。まず、きずなの始まりとして「石井先輩とスポーツ科学との出会い、1961 年」である。90 分にわたる時間は、

①1964 年～　筋力と疲労の研究「火事場の馬鹿力の科学」
②1966 年～　動作前サイレント・ピリオドの研究「動作を先導する抑制現象の提言」
③1972 年～　障がい者の体力研究「アダプテッド・スポーツの提言」

などの豊富な資料にもとづくお話をされた。何度聞いても興味深い話であった。矢部先生のお話から卒論のテーマを見出したびわこのゼミ学生もいた。その後、私の拙い「ご家族の近況報告」である。

石井先生が生きておられた時、緊張して電話口でも「気をつけの姿勢」をしていた私がいたが、奥様の澄子ご婦人と喋っている時は何となくリラックスできた。石井先生がなくなられた直後に奥様が、「良い主人でした、良い人でした」とおっしゃっていたのが忘れられない。大学でも家庭でも裏表のない筋のとおった石井先生の生き方を垣間見た。「みなさんには怖かったでしょ」ともおっしゃった。

私が博士論文を持参した際には、「先生のおかげで取れました」と申し上げると、「それは違う。矢部君が面倒を見たんだ」とおっしゃり、恐縮した思いであった。石井研究室のみんなに伝えてほしい。「縦軸が血圧で横軸は日時」石井先生は最後の最後まで学者であった。「新宅君は学位をとったのか。僕もとっていないのに」と石井先生はみんなの博士論文を書かれて、自分のものは後回しにされた。

「あの頃は、月 20 万は使ったかな」とも。そういえばいつもご馳走になっていたわれわれがいた。とにもかくにも我々は、120 パーセントで指導を受けた。石井先生は生前「自

分に何かあっても大学関係者には報告するな」と奥様におっしゃっていたのである。奥様はその言葉を忠実に守ろうとしたが、長女千春ちゃんの一言「石井研究室のみんなに連絡をしないのはおかしい。パパは家族よりも学生を愛していたのだから」で、奥様の気持ちが変わったとも。その一言で奥様は、富山大学の小野寺さんに連絡したのであった。小野寺さんは深夜車を飛ばしたということである。奥様は、主人がみんなに伝えたかったことは「僕も猪飼先生のもと 10 年東大で頑張った。君たちも頑張れば何かがある」とおっしゃった。われわれは「筋を通すこと。わき目も振らず一つのテーマに邁進していくこと」の重要性を学んだ。

最後に石井先生の霊園を記しておきたい。なお奥様と千春ちゃんの電話番号はお変わりありません。

霊園:　柏メモリアルガーデン(長男・勉君が千葉在住であるため)

千葉県柏市増尾 180-2

JR 柏駅から車で 15 分

※石井先生のご家族の詳しいご住所、連絡先をお知りになりたい方は、事務局までご問い合わせください。

shintaidousa-office@ml.nittai.ac.jp

最後に参加者全員で集合写真

【偲ぶ会の様子】

矢部先生

新宅先生

小野寺先生

会の様子

会長挨拶

【懇志会の様子】

懇親会の様子　助手を務められた先生方と石井先生とのエピソード（西山先生、林先生）

石井先生と様々な思い出を語り合いました

石井研最後の院生大石先生の体育学会での石井先生とのエピソード

石井先生と一番一緒に飲みにいった方は？

平成２６年度　第２８回身体動作学研究会のご連絡

日時：未定
場所：日本体育大学（世田谷キャンパス）（予定）
実行委員長：和田匡史（国士舘大学）
実行委員：佐藤孝之，袴田智子，船渡和男，和田匡史，西山哲成，古川真衣，
大石健二，柏木悠

第 28 回身体動作学研究会の開催についてご連絡致します。前回の研究会にて次期研究会の開催場所および実行委員長が決定いたしました。
主なトピックスといたしましては・・・・・
外部資金の取り方、原著論文の書き方、共同研究提案、若手就職アピール・・・・・
などなど，まだまだ検討段階ですが考えております．持ち込み企画も受け付け致します。
詳細については、「平成２６年度身体動作学研究会・大会実行委員会」より後日ご連絡がいくかと思います。皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

～編集後記～

多くの身体動作学研究会会員のご協力を頂き、ニュースレターがほぼ予定通りに発行できました。学会等でお忙しい中にも関わらず、執筆にご協力頂き誠にありがとうございました。

さて、この度のニュースレターは、研究会から国際学会の報告、また国際学会のアナウンスと多岐にわたる内容となっています。会員の皆様方におきましても、新しい知の発見(研究)に向けたよい刺激になるかと思っています。これからも研究会会員の活躍や学会情報を発信していきたいと考えています。研究成果や、学会情報など本紙を通じて告知したいことがありましたら、是非編集委員までご連絡ください。

また、2020 年オリンピック開催地が東京に決定し、国内におけるスポーツ・体育に関わる研究および実践がさらに注目されています。本誌(本研究会)も東京オリンピック 2020 に、また社会貢献に携わる情報を発信していきたいと考えています。会員の皆様からの東京オリンピック 2020、トップアスリート育成(トレーニング方法)、国民の健康維持増進など様々な情報(研究成果)も合わせてお待ちしています。

(東京国際大学：大石健二)

発　　行　身体動作学研究会
東京都世田谷区深沢 7-1-1
日本体育大学スポーツバイオメカニクス研究室
（旧身体動作学研究室）
編集担当　和田匡史（国士舘大学）
大石健二（東京国際大学）
柏木悠　（日本体育大学）
袴田智子（国立スポーツ科学センター）